安政５年海防御見分における大庄屋木船家の役割

上武　恒介

はじめに

本稿では、安政５年（1858）の海防御見分において田辺藩大庄屋木船家が果たした役割を検討する。近世田辺藩における幕藩領主の巡見を概観すると、将軍の就任時には幕府役人によって諸国巡見が、また平時には定期的に藩役人によって野形見分等が実施されていた。とりわけ本見分に着目する理由は、上記の見分に比してそれが臨時的かつ突発的な性格を有しており、大庄屋木船家の役割を検討する好例と考えられるからである。さらに、その役割を検討することで、衛門の業務遂行を可能にした背景にも迫ることができると考えられる。なお、本稿では史料の制約上、巡見使到着までを検討の対象とした。

１　木船家と安政５年海防御見分の概要

田辺藩領内の村々は中筋組や志楽組など８組の大庄屋組に編成されており（図）、祖母谷組溝尻村に居住した木船家はその大庄屋を勤めていた。「大庄屋名前記録」（木船衛門家文書 14-945）によれば、文化３年（1806）年以降、惣右衛門、藤右衛門、衛助が木船衛門を襲名し、３代にわたって大庄屋を勤めていたことが分かる。このうち、安政５年海防御見分時に大庄屋を勤めていたのが同２年に襲名した３代目衛助である。

本見分は、安政４年の条約交渉において幕府が直面した新潟開港問題に対処するため、すなわち新潟に替わりうる開港場を選定するために実施されたものである。巡見使の構成員は箱館奉行兼帯外国奉行の堀利熙や目付駒井朝温らを中心とする一行であり（14-211）、翌年 10 月 11 日に江戸を出発した。その行程は、中山道・北国街道を北上して越後国へ、その後木曽路を経由して越中国以西の北陸諸国を巡見するものであり、一行は 12 月 1 日早朝に田辺藩領吉坂村に到着した。

２　巡見使到着までの木船家周辺の動向

木船衛門が巡見使来訪の情報を最初に入手したのは 10 月 18 日であった。当日朝、藩の下役に呼び出された衛門と志楽組大庄屋の梅垣西浦両人は、巡見使の予定行路や見分に係る業務などを聞き受けた。これ以降、衛門は藩役人や村役人との相談内容を「海防御見分記録」（14-219）に記録している。以下、巡見使到着までの衛門及びその周辺の動向を本史料に拠りつつみていきたい。

18 日、衛門は下役に巡見使到着の時期や具体的な順路について尋ねたが、下役は「一向相分り不申」と何事も普段の御巡見通りであるから心得ておくようにと指示するのみであった。このため、両人は相談の上東西の大庄屋仲間一同が参会すること、過去の御巡見記録を各々持参することなどを通達した。20 日に行われた会合では衛門は大庄屋惣代となり、先例を吟味

した上で順路や休泊場所の詳細を決め、大庄屋のいずれかが若狭、越前へ聞き合わせに参上する旨を伺っている。実際、文書群には奉行や代官による野形見分の際の順路写や宿割の覚が一括関係で保存されており、会合ではこれらの記録を参考にしたのであろう。また、後述するが他国への聞き合わせに関しては、11 月 23 日以降に衛門自身が越前まで出張している。

27 日には下役から祖母谷組清道村を小休場所とするよう沙汰があり、衛門はその次第を当村へ伝達した。しかし、実際の村況を把握した上で具体的な小休場所を決定する必要もあり、11 月９日から 11 日にかけて衛門は濱村・清道村庄屋と共に下見や宿割を行っている。同月に衛門は祖母谷組や志楽組などの石高、家数、人数などを一覧化した「御巡見御通筋万記」を作成しており（14-354、357）、村況を把握することで巡見使接待に向け「万端入念相勤」めていたと言える。

このように、衛門は大庄屋仲間に参会を呼びかけるなど巡見使接待の準備において中心的役割を果たしていた。また、藩役人と村役人の中間として調整や伝達を担いつつも、各村役人と共同して巡見使接待に係る準備を差配し、情報収集に努めていた。

３　木船衛門の越前出張と在村庄屋の大庄屋代行

前述の通り、木船衛門は巡見に係る聞き合わせのため、11 月 23 日から晦日にかけて越前まで出張した。その留守中は「万端居村藤左衛門へ心得預置」いて溝尻村庄屋の息子に組内 12 ヶ村を任せている（14-359）。したがって、ここではこの間における大庄屋心得藤左衛門の業務と衛門の他国出張を可能にした背景を考察したい。

衛門が出発した翌日以降、藤左衛門のもとに西浦や泉源寺村御宿懸りから連日急御用が届いている（14-306、309 ～ 311、315 ～ 317、323）。その一例として、25 日には泉源寺村御宿懸りから極上行灯３つ、上燭台７つ、毛氈 10 枚などを祖母谷組から借用したいと藤左衛門に願っている（14-310）。上記の御用では共通して、巡見使が志楽組内を通過する際の人足の調達、宿泊の際に利用する備品の供出を祖母谷組に依頼しており、連日の急御用に藤左衛門が対応していたことを窺わせる。

この間に衛門が大庄屋惣代として越前へ出張した理由に、祖母谷組の地理的位置を指摘できる。当組は若狭国や丹波国との国境に接しているため、当該期には他所稼とそれに伴う他領との山論も増加しており、したがって大庄屋は仲裁を担う中で他領の事情に精通するようになったと考えられる。さらに、嘉永８年（安政２年）には先代木船衛門の次男綾次郎が若狭国高浜町の安左衛門に養子入りする（18-80）など、若狭国との縁戚関係も有していた。

以上より、衛門が出張した背景を地理的位置と息子による大庄屋代行に見出せる。ただし、なぜ近世前期から大庄屋を勤め、より若狭国に近接した梅垣家ではなく、安政２年に襲名したばかりの衛門が出張したのかは判然としない。少なくとも、両者が巡見使接待において中心的役割を果たした背景に若狭国との関係性があったことは確かだろう。

おわりに

以上、雑駁ではあるが安政５年海防御見分における大庄屋木船家の役割について考察してきた。その役割とは、藩役人と村役人の調整を担いつつも庄屋との共同業務によって村々を差配

することであった。また、本見分においては衛門は大庄屋の中でも中心的存在であり、他国出張の任務も果たしていたことも明らかとなった。これらの背景には、第一に地理的位置とそれに起因する他国との密接な関係性、第二に息子藤左衛門による大庄屋代行があったと言える。

最後に、木船衛門が「海防御見分記録」を記した背景について若干の展望を示したい。巡見使来訪を聞き受けた当初、衛門は「御巡見之記録吟味之上」大庄屋仲間一同と相談し、伺いを立てた。安政２年に大庄屋に就任した衛門においては、今回の事態は「一向相分り不申」ものであり、それゆえ先代の記録が重要な意味を持っていたと考えられる。「海防御見分記録」についても、衛門が息子への行政の継承を目的に作成した可能性を指摘できる。

本稿では十分な検討はできなかったが、大庄屋木船家の行政能力とその継承システムを解明するためにはこのような記録の分析が必要であると考える。

参考文献

上白石実『幕末期対外関係の研究』吉川弘文館、2011
東昇「丹波上林・君尾山と丹後祖母谷組の山林資源と利用」（京都府立大学文化遺産叢書 20『綾部地域における文化資源の発掘と継承　―君尾山光明寺文化財調査報告Ⅰ―』82 ～ 86 頁、2021）
舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史』通史編上、舞鶴市、1993
舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史』年表編、舞鶴市、1994

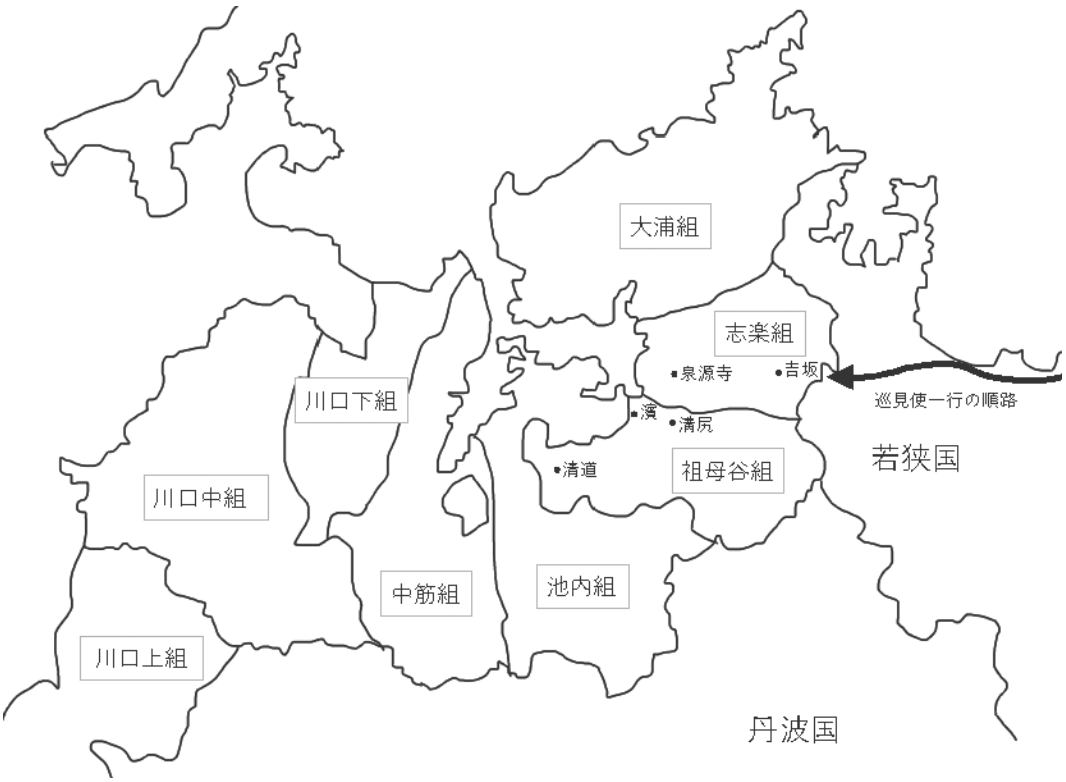

図　大庄屋８組の位置関係と巡見使一行の順路
（まるまる舞鶴 WEB「近世の大庄屋組」をもとに作成）

表紙の解説

	1　2　3
5	4
（裏）	（表）

1　「まるまる舞鶴」WEB
2　日下安左衛門宅家相図（部分、木船衛門家文書 17-233）
3　舞鶴地方史研究会との共同調査　長谷川巴南撮影
4　東舞鶴港俯瞰（多祢山からの展望）　松岡秀雄氏撮影
5　東舞鶴高校での授業風景　長谷川巴南撮影

京都府立大学文化遺産叢書（2008 ～　京都関係）

1　南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
3　八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図 : 地域文化遺産の情報化
4　八幡地域の古文書・石造物・景観 : 地域文化遺産の情報化
5　丹後・宮津の街道と信仰
6　城陽市域の地域文化遺産 : 神社・街道の文化遺産と景観
9　和束地域の歴史と文化遺産
10　石清水門前寺院・南山城地域の古文書 : 京都府歴史資料の調査
11　舞鶴地域の文化遺産と活用
12　「丹後の海」の歴史と文化
14　舞鶴・京丹後地域の文化遺産
16　舞鶴の地域連携と世代間交流 : 井上奥本家文書調査報告
18　京都東山・三嶋神社文書調査報告
19　京都雲ヶ畑・波多野六之丞家文書調査報告
20　綾部地域における文化資源の発掘と継承
21　京都山伏山町文書調査報告
22　あのころの雲ヶ畑 : 京都雲ヶ畑写真資料調査報告
23　文化財の保存活用と地域コミュニティ
26　京丹後市久美浜町太刀宮文書（久美浜代官所郡中代文書）・佐治家資料調査と御用留横断研究
27　君尾山光明寺文化財調査報告・由良神社文化財調査報告
28　夜久野の後期古墳と末窯跡群

京都府立大学文化遺産叢書　第 30 集

舞鶴木船衛門家文書調査報告
京都府北部 MALUI 連携事業

編　集　　東　　昇
発　行　　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日　　2024 年 3 月 31 日
印　刷　　株式会社サンエムカラー
〒 601-8371 京都市南区吉祥院嶋樫山町 37